

徳を教えることについて プラトン『メノン』 におけるソクラテスとアニュトスの対話

松 井 貴 英

序

対話篇の冒頭での「徳は教えられうるか」という問いから哲学による問答が展開されるプラトン『メノン』において、89e 95a で、ソクラテスの対話相手は、一時、メノンからアニュトスへと交代する。そして、ソクラテスは、アテナイにおいて徳ある者であるとされた政治家たちを例に出し、彼らが自身の息子たちを自分たちに劣らぬほどの徳ある者としてすることができなかったことについて対話し、彼らは息子たちに徳を教えることができなかったとする。そして、アニュトスは怒ってしまう。

この議論は、一見すると、必要の無い議論であるように思われるかもしれない。たしかに、『メノン』冒頭からのソクラテスとメノンの対話に、唐突に差し込まれているような印象を持つ読者もいるであろう。また、ソクラテスとアニュトスは、二人の対話の前半でのソフィストについての対話を除けば、特定の個人が息子に徳を教えることができなかったことについて対話するのみ
いわば *ad hominem* な対話であるともいえようか に終始する。しかし、プラトンがこのような対話を、この箇所において、このようなかたちで、このような内容で、ソクラテスとアニュトスに対話させていることには、何らかの意図があるようにも思われる。

本論文では、このソクラテスとアニュトスとの対話における、徳を教えるこ

との困難さを具体的な人物を例示して行われていることに関する解釈を試みる。

さらには、プラトン『メノン』が、「徳を教えることができるか」を主題として問答が展開される対話篇であることから、この箇所に関する考察を通して、本論文が徳についての特に、徳を教えるということについての倫理的な側面からの考察の端緒となることを目指す。その際、現代の徳倫理学における徳に関する考察を踏まえつつ、現代における徳論との比較検討等を試みていく。それにより、本論文は、プラトンにおける徳とそれに基づいた善い生き方についてのさらなる考察のための端緒となるものであるといえよう。

1・対話相手に関わる問題

ソクラテスとアニュトスによる対話において問題とされていることは、徳ある者たちが自分たちの息子を教育によって徳ある者として行うことができなかったことである。ソクラテスと共にこの対話を行うのが、(ソクラテスと奴隷の少年との対話を除けば)ここまで対話を続けてきたメノンではなく、突如現れたアニュトスである。この、対話相手に関わる問題についての解釈が、この箇所を読み解くためには、まずは必要であるように思われる。

想定できる解釈の可能性を分類するならば、以下のように分けることができるだろう。

- 1 メノンとアニュトスの資質や能力に関わるのかどうか。
- 2 単に、彼らが{知っていた/知らなかった}からか。
- 3 そうすることに関して、プラトンに何らかの意図があったのか。

それぞれの問いを、それぞれの登場人物に関する問いとして書き直すならば、次のようになるだろう。

- (M1) メノンとは、そのような問いを扱う対話ができなかった、あるいはそれをするのが困難であった要因は、メノンに具わっている資質や能力か、あるいはそれ以外のものか。
- (M2) 単に、ソクラテスとアニュトスの対話に登場する徳ある者たちについて、この対話が始まる時点で、メノンは知らなかったからか。
- (M3) プラトンに、対話篇の展開上、ソクラテスとメノンとの間においてこのような対話をさせなかったことに、何か意図があったのか。
- (A1) アニュトスとは、そのような問いを扱う対話できた要因は、アニュトスに具わっている資質や能力か、あるいはそれ以外のものか。
- (A2) 単に、この対話に登場する徳ある者たちについて、この対話が始まる時点で、メノンは知らなかったが、アニュトスは知っていたからか。
- (A3) ソクラテスとアニュトスの対話に登場する徳ある者たちについて、アニュトスに語らせることに、何か意図があったのか。

これらの問いを検討するために、まず、『メノン』における、ここまでのソクラテスとメノンとの対話の展開を概観する。また、ソクラテスの対話相手であるメノンとアニュトス、そしてソクラテスとアニュトスが対話の中で言及した徳ある者たちについて概観していく。

2・前提となることがらの確認

2-1・アニュトス登場までの対話の展開

まず、アニュトスが登場するまでの『メノン』におけるソクラテスとメノンの対話を概観していくことから始めたい。

この対話篇は、「私に言うことができますか、ソクラテス、徳を教えることができるか」¹(70a)というメノンの問いをきっかけに始められる。ソクラテスは、徳はどのようなものであるかを問う前に、徳とは何かを問う必要が

あることを述べ、メノンと共に徳の定義を特定するために対話を行い、徳は正義かどうか等の検討がなされる。しかし、この対話は困難に陥り、「知らないものを探求することはできない」というメノンの提示した探求のパラドクス(80d)への返答として、ソクラテスは「探求するとか、学ぶとか、というのは、全体として想起である」という命題を提示し(81d)メノンの奴隷の少年を相手に幾何学の例題を用いて、想起の実演を行う。そして、奴隷の少年とソクラテスとの想起の実演(82b-86c)の後、ソクラテスとメノンは、仮設の前提を基にした探求の方法を行う。そして、仮設を基にした探求によって、「徳は知識であるなら徳は教えられうる」が結論づけられた直後、ソクラテスは、この結論に対して、仮設の前提への疑問を理由に、異議を申し立てる(89c-e)。そして、そこにちょうどよいタイミングでアニュトスが現れる。

2-2・メノンとアニュトス

アニュトスの客としてアテナイに来ていた(90b)テッタリアの若者であるメノンは、対話篇冒頭からのソクラテスとの対話の中でも、何度かゴルギアスを賞賛、あるいは支持する発言を行っていることから、弁論術の大家であるゴルギアスに心酔している若者として描かれている²。テッタリアの都市パルサロスの、アテナイと縁の深い有力な貴族の家に生まれた彼の今回のアテナイ訪問は、アテナイへ援助を求めるために派遣されたといった、何らかの政治的目論見によるものとも考えられる³。

アニュトスは、ソクラテス裁判において、告発者である若者メレトスを後ろから操っていたとされる、当時アテナイにおいてそれなりの支持を受けていたとされる有力者であった。この点に関しては、アニュトスは、父アンテミオン

1 本論文において、『メノン』の日本語訳は、基本的に、藤沢令夫の訳(プラトン全集)を参照しつつ、必要がある場合には筆者が適宜翻訳をしている。

2 71c-76c-d

3 Bluck, pp.121-122

により立派に育てられ教育され(この点に関しては、Sharpley がこの箇所は父アンテミオンが持っていた優れた性質をアニュトスは欠いていることを暗に意味していると解する⁴ように、対話篇中のソクラテス(そして著者のプラトン)による皮肉が多分に込められていると解されうる) アテナイの民衆が彼を最も重要な官職に選んで就けている旨のソクラテスの発言からも窺い知ることができる⁵。また、アニュトスは、この対話篇では、ソフィストを嫌っている旨の発言をするなどしている⁶。ソクラテスが徳を持ってはいないことを皮肉によりほめかしているアニュトスが、アテナイの民衆により最も重要な官職に選ばれていることをソクラテスが述べていることから、プラトンは、一般民衆に対して、人を見る目が無いか、あるいは人を要職に就けるために必要な判断

4 Sharpley, p.169

5 90b

6 92b-c アニュトスのソフィストへの嫌悪を表した発言は、国家がソフィストを追放しないことへの不満である。またそれに対して疑問を持ち、ソフィストと会ったことはあるのかと問うたソクラテスに対し、アニュトスは、会ったことはないが彼らがどんな人間かを知っていると答える。この点は、ソフィスト嫌いなアニュトス、他の対話篇におけるソフィストたち(プロタゴラス、ゴルギアス等) 特にゴルギアスに関しては、『メノン』と『ゴルギアス』の対話篇執筆時期に近いことに、何か関係があるようにも思われる)とアニュトスら民衆の支持を受けている政治を行っている者の違いを、当のアニュトス自身が述べていると考えることもできよう。この点に関しては、たとえば、法廷弁論術に長け、その教師の大家であるゴルギアスと、ソフィスト嫌いのアニュトスが、ソクラテスの問いに、知らないのに知っているという同様の返答を行っている。ここに、ソクラテスの哲学的問答法と、ゴルギアスの弁論術(あるいは、ソフィストの方法といっても差し支えないかもしれない)と、アニュトスのような政治家や彼を支持するような民衆との違いを読みとることもできよう。また、この三者は、或るそれぞれが他のそれぞれを同じ穴の貉だと思っているかもしれない、もしそうだとすれば、それはどのような点においてそのようなものか? といった問題をこの箇所が孕んでいるとする解釈の可能性にも繋がりうるものであるようにも思われる。この問題は、本論文の先にある研究であろう。おそらく、解釈の方向性としては、ソフィストたちと政治家や民衆が、共に、知らないことを知っていると堂々と述べていることに関わる、プラトンによる、彼らと哲学する者との違いをどのように解釈するかという問題であろう。この箇所に関していうならば、そのような解釈に関わる、何らかのほめかしのようなものが、この箇所に隠されているのではないか ということになるであろうか。しかし、今回は、この問題に踏み込むことはしない。

力を欠いていると考えているとも解しえよう。このことから、プラトンは、彼ら一般民衆も、アニュトスと同様、徳を持っていないということを、この箇所でも暗に示しているとも解しえるように思われる。そして、このことは、プラトンが、アニュトスを、当時のアテナイにおける至極一般的な市民の立場を代弁する者⁷としても、ここで登場させている可能性があるとも解しえよう。

2 - 3・ソクラテスとアニュトスにより言及される人物

ソクラテスとアニュトスによって、アテナイの有名政治家らが言及されている。

まずはアニュトスの父アンテミオンの名を、アニュトス登場に際して、ソクラテスは挙げる。先述のとおり、アンテミオンはアニュトスを立派に育て教育したとされるが、先述のとおり、この発言には皮肉が多分に込められていると解されうするため、やはりアンテミオンも、息子を徳ある者として育てることはできなかったと、プラトンは判断していると解してよいだろう。

そして、ソフィストへの言及の後、アテナイにおける有名な政治家たちについて言及される⁸。アテナイの有名な政治家であり、B.C 490年 - 479年に起きたペルシア戦争において、ペルシアを破ったことで名を馳せたテミストクレス⁹とその息子のクレオパントス(93c)。テミストクレスと同時代人であり彼とは政敵であった¹⁰、優れた政治家でありアテナイの反映を築いたアリストイデス¹¹(94a)とその息子のリュシマコス。アテナイを発展させた非常に力量のあった民主政治における主導的立場であった政治家のペリクレス¹²(94b)とその息子のパラロスとクサンティッポス。ペリクレスと同時代人であり彼とは政敵

7 Bluck(p .126) は、アニュトスを、democratic politician であるとしている。

8 以降の政治家たちの紹介については、Bluck, pp 369 380 Scott, p .164を参照。

9 Bluck, p 369 Scott, p .164

10 Bluck, p 369

11 Bluck, p 373 Scott, p .164

12 Bluck, pp 374 375 Scott, p .164

であった¹³、アリストテレスがアテナイにおける最高の政治家の一人に挙げ、多くの人が彼を真摯であり優秀な政治家であると評した、B.C 443年に陶片追放されるまでは保守的政治家として名を馳せたトゥキュディデス¹⁴ (94c) とその息子のメレシアスとステパノス。ソクラテスは彼らを例に挙げ、アニュトスと共に、彼らが息子を徳ある者として育てることができなかったことについて対話をする。そして、徳ある政治家であった彼らについて、ソクラテスとシミアスは、結局、息子を、自身と同等あるいはそれ以上に徳ある者として育てることができなかったとする。

Bluck¹⁵や Scott¹⁶が述べるように、この箇所でのソクラテスとアニュトスの対話は、ad hominem なものであることは、疑いようのないことであるように思われる。とはいえ、たとえ ad hominem な対話であるとはいえ、それをそのように執筆したプラトンには、そのように執筆した何か意図があるのではないかと解することができるようにも思われる。

3・具体例の扱いについての解釈の問題

Bluck¹⁷は、この箇所に関して、ソクラテスとアニュトスとの対話において問題とされるべきであったことは、次の三点であったと解する¹⁸。

- (1) たとえ徳は教えられうるものであるとしても、これら特定の父親たちは徳を教える方法を知らなかったのではないかと。
- (2) 彼らの息子たちは徳を獲得するのに必要な生まれもつての資質を持って

13 Bluck, p 369

14 Bluck, pp 377 380 Scott, p .164

15 Bluck, pp 27 28

16 Scott, pp .165 166

17 Bluck, pp 25 30

18 Bluck, p 25

いなかったのではないか。

(3) 徳は教えられうるものではないのではないか。

Bluck¹⁹は、その中で、ソクラテスは、一番目と二番目の問題については考えることさえせず、三番目の問題について扱うことで満足していると解する。そして、一番目の問題については、93b でこの点について述べているにも関わらず、露骨に無視しているし、第二の問題についても、アニュトスが92e において「あらゆる徳ある人と呼ばれる者は、徳を教えることができる」と述べているにも拘らず、(そうであれば徳が教えられなかった原因は息子に帰するということになるであろうがその点に関しては) 特に何か述べることもしていないとする。そして、この点に関して、『プロタゴラス』(327b) における議論を引き合いに出しつつ、この点に関して、『プロタゴラス』においては、この問題に関して対話はなされるが、答えは出されないのに対し、『メノン』においては、この問題に関して対話さえなされないと述べる。このように解した後、Bluck は、このような議論はここでは不要であったがゆえに (というのも、アニュトス自身が該当者であるがゆえに) 俎上に乗せられなかったと解する。

Bluck のこの解釈に関しては、(2) に関しては、テミストクレスと息子のクレオパントスに関する対話における、ソクラテスが「彼の息子の素質が悪かったのだと申し立てることはできないわけだ。」と問い、アニュトスが「おそらくできないだろう」と答えた箇所 (93d e) を額面どおりに受け取れば、問題とはならないように思われる。しかし、たとえ額面どおりに受け取らなくても、このソクラテスとアニュトスの対話を、ソクラテスは、確実に真なるものではなく、推論であり、仮のものであると考えていたと解することも可能であるようにも思われる²⁰。これは、Bluck の (1) に関してもいえるように思われる。すなわち、ここでの対話が推論であり仮のものであるがゆえ、それを一層先へ

19 Bluck, p. 27

20 Scott, p. 162

進めていくことを避けていると解することも可能であるということである。それはすなわち、このような内容の対話は ad hominem な議論を一層先へ進めてしまうことになってしまうがゆえに、それを避けるために、あえて言及しなかったのではないかと解することであるともいえよう。また、Scott のように、たとえソクラテスがこの箇所での対話により徳は教えられえないと信じるに至ったとしても、彼は、ここでの議論が、そう信じるために必要なものの単なる一部分であるとみなしていると解することも妥当であるように思われる²¹。

ここまでの解釈とは異なる方向から考えても、Bluck による理由（アニュトス自身が該当者であるがゆえに というもの²²）は、適切な解釈ではないだろう。この対話篇において、ソクラテスの対話相手が、ここでの対話においてのみ、メノンからアニュトスに代わったことが、そのような理由のみによるわけではないようにも思われるからである。もしこのような理由のみであれば、プラトンは、ソクラテスに「そういえば、メノン、君がアテナイ滞在中に客人として世話になっている²³アニュトスは、徳のある父を持ちながらも、徳のない者であって……」といった発言をさせ、それを契機にソクラテスとメノンによって、アテナイのかつての徳ある者たちとその息子たちに関する対話を展開させることも可能であったようにも思われる。しかし、プラトンは、そうすることをせず、アニュトスを登場させている。そのように考えることが無理筋でないなら、Bluck が解するようなこと以外の意図が、アニュトスを登場させたことに含まれているとすることも可能であるだろう。

このような解釈に対して、メノンはアテナイ生まれではないがゆえに、アテナイのかつての徳ある者たちについての知識を持っていないのではないかという反論が出されるかもしれない。しかし、メノンは、アテナイと縁の深い

21 Scott, p.167

22 Bluck, p. 27

23 90b から、このような発言が可能であるといえる。

貴族の家に生まれていて、今回、20歳前後の若さ²⁴でアテナイを訪問している。また、アテナイの有力な政治家²⁵であるアニュトスの客人である。この点から、アテナイに関する何らかの情報や、アテナイにおける過去の有力政治家たちについての話等を耳にする機会があったかもしれないと推測することも、無理筋ではないだろう。もちろん、これは推測の域を出ないのだが、そのように考えることも不可能でないように思われる。

4・問いの検討

ここで、1章で提示した問題を、もう一度見てみよう。

- 1 メノンとアニュトスの資質や能力に関わるのかどうか。
- 2 単に、彼らが{知っていた／知らなかった}からか。
- 3 そうすることに関して、プラトンに何らかの意図があったのか。

ここまでの議論、特に3章の議論から、「2 単に、彼らが{知っていた／知らなかった}からか」に関しては、問題としない方が適切であるといえるだろう。アテナイにおける過去の有力政治家たちに関して、アニュトスは知っていて当然であるが、メノンも、話を聞いたことが全く無いような環境にいたわけではないと解しうるからである。

では、「1 メノンとアニュトスの資質や能力に関わるのかどうか」についてはどうだろうか。少なくとも、ソクラテスとの対話により怒って黙り込んでしまう²⁶アニュトスよりも、困難に陥りつつも、ソクラテスをシビレエイに喩

24 Bluck, p.122 Sharples, p.18

25 Bluck, p.126

26 これについては、怒ったアニュトスがある場を去ってしまったとする解釈と、その場に残っているとする解釈とがあるが、今回は、特に重要な問題ではないと考えられるため、怒って黙り込んでしまったとする解釈に従うこととする。

えたり探求の不可能性のパラドクスを提出したりするメノンの方が、ソクラテスと問答を行う適性や能力を具えているように思われる²⁷。そのため、ソクラテスとアニュトスが行った対話を、メノンが、能力が無いからという理由で、行うことができないということは考えにくいだろう。それとは逆に、ソクラテスが *ad hominem* な要素を含む対話であるがゆえにこの内容での対話をメノンにはさせたくないと考えたとする解釈を採用するのであれば、それは、メノンとアニュトスの能力によるものではなく、プラトンに何らかの意図があったから（もちろん、単に *ad hominem* な対話をメノンにはさせなくなかったという単純な理由ではなく） というのが、その理由であるということになるだろう。

この問題を、メノンについてまとめると、次のようになる。(M1) に関しては、メノンに具わっている資質や能力によって、メノンは、ソクラテスと、そのような問いを扱う対話ができなかったわけでもなく、あるいはそれをするのが困難であったわけでもなく、要因はそれ以外のものということになる。(M2) に関しては、ソクラテスとアニュトスの対話に登場する徳ある者たちについて、この対話が始まる時点で、メノンが知っていたか知らなかったかは不明であり、これは問題とはならない。(M3) に関しては、プラトンが対話篇の展開上、ソクラテスとメノンとの間において、このような対話をさせなかったことに何か意図があったのではないかとする解釈の余地は残されている。

アニュトスについてまとめると、次のようになる。(A1) に関しては、ソクラテスとアニュトスがそのような問いを扱う対話ができしたのは、アニュトスに具わっている資質や能力によって、アニュトスにしかこの対話ができないというわけではないため、要因はそれ以外のものということになる。(A2) に関しても、アニュトスしかこの対話に登場する徳ある者たちについて、この対話が始まる時点で、知っていたとは必ずしもいえないため、これは問題とはな

27 松井「メノンは賢いか否か」参照。

らない。(A3)に関しては、ソクラテスとアニュトスの対話に登場する徳ある者たちについて、アニュトスに語らせることに、何か意図があったのではないかとする解釈の余地は残されている。

このように解することが妥当であるとすれば、この対話がソクラテスとアニュトスにより展開されているのは、「そうすることに関して、プラトンに何らかの意図があったのか」ということになり、それは、先に述べたような、単に ad hominem な対話をメノンにはさせたくないという理由ではなく、この対話篇全体に関わる理由によると解することもできよう。

ところで、プラトンは、ソクラテスとメノンには、この箇所直前まで、この頃にプラトンが影響を受けた幾何学の探求の方法を活用した対話、すなわち仮設の前提に基づく探求を用いた対話をさせていた。ソクラテスとメノンは、この対話篇において、ここまでで、それ以外にも、ソクラテス的問答法、想起説に関する対話を行ってきた。もしプラトンが、ソクラテスとメノンの対話を、「徳とは何か」そして「徳は教えられうるか」を探求のテーマとして、様々な探求の方法を試みるものとして、この対話篇を執筆しようと考えていたとすれば、そして、探求のテーマについての探求、すなわち「徳とは何か」そして「徳は教えられうるか」について探求することそれ自体よりも、様々な探求の方法を用いることの方に、プラトンが重点を置いて、この対話篇が執筆されたと解することが無理筋ではないとすれば²⁸、次のようにいえるのではないだろうか（もちろん、探求のテーマについては、特に何であってもよかったとプラトンが考えていたと解するわけではない）。すなわち、ソクラテス的問答法、想起説、仮設の前提に基づく探求を用いた対話に比べ、探求それ自体のレベルの低い、ad hominem な対話に陥りやすい、具体的な人物について評するような対話をメノンに行わせることで、哲学的な探求と哲学的ではない探求とが読み手に混同されることを、プラトンは避けようとしたのではないかと解されるのである。もしそうであるならば、アニュトスとの対話の部分は、必要ではあるが、メノンには語らせなかったことに関する何らかの意図を、プラトンが持つ

ていたと考えることもできるように思われる²⁹。

5・徳の倫理学からのアプローチ

古代ギリシアの徳（アレテー）は卓越性であるとされる。しかし、どのような意味での、どのようなレベルでの卓越性であったかについては、時代により、また徳に言及する人により、異なる。プラトンよりも前の時代においては、徳ある人は現世で成功する人であったとされていた³⁰。それに対して、プラトン

28 この点に関しては、ソクラテスとアニュトスとの対話において、Bluck (p. 25) において示した三つの問題の第二点（徳ある者たちの息子の能力の問題）について、ソクラテスが93d-e 以外では言及してしていない点についても、それが、この対話篇における隠されたテーマのひとつであるともいえる「探求の可能性」に関わりうる（特に、哲学探求を行いうる者の条件に関わりうる）ものだからであるともいえるかもしれない。しかし、この問題の検討は、本論文では扱わず、今後の課題としたい。また、プラトンは、想起、仮設の前提に基づいた探求という、初期対話篇には見られなかった探求の方法を、『メノン』において提示した後、あまり時間を空けることなく執筆されたであろう『パイドン』65-69において、logismos そして dianoia に関わる探求は達成可能であることを、暗に示していたり、想起説もイデアの知識獲得の方法として述べられていたり、仮設に基づく探求も登場していたりする。そのような、『パイドン』において言及されている、『メノン』においてよりもヴァージョンアップしている探求の方法と、『メノン』におけるこれらと比較することで、プラトンは、『メノン』においては、探求の方法に関しても、模索の途中であったと解することも可能であろう。本論文で扱っている問題は、このような解釈の可能性を探る方向へと進みうるようにも思われる。しかし、やはりこの問題に関しても、本論文では扱わず、今後の課題としたい。

29 徳ある者が教育によって息子を徳ある者にすることができなかった具体例を示すことで、「徳は教えられうるか」という問いにおける、ある種の反例とするような方法のために、ソクラテスとアニュトスとの対話が挿入されたのか、そしてそれが、数学の探求の方法に影響を受けたプラトンが、どの程度それを意識していたかという問題（すなわち、徳ある者についての対話が数学の探求の方法と関わるか否か、関わるのであればどの程度関わるのか についての問題）については、見当の余地があるだろう。

30 Kamtekar, p. 29 訳については、『ケンブリッジ・コンパニオン徳倫理学』を適宜参照。以降同様。

においては、徳はある種の知恵であるということを基本に置きつつ、徳の知識を持っているものは徳ある行動を行うことができるとされる。また、善い人生を送るためには知恵が必要であるとされる。この傾向は、『メノン』にも現れている。冒頭のメノンによる「徳は教えられうるか」(70a)という問いに対して、ソクラテスが「徳が教えられうるかを知っているどころか、徳が何であるかさえ知らない」(71a)「あるひとつのものが何であるかを知らないとしたら、それがどのような性質のものかということはどうして知ることができるだろうか」(71b)と返答する。このような探求における定義の優先性は、アイデアの知識は我々の魂を完成させ、有徳にし、幸福にする³¹ことと強く結びついており、これが我々の持つ最善の能力を発揮させる³²こととなる。

このことを考慮すれば、ソクラテスとアニュトスの対話において言及された徳ある者たちの持っている徳は、プラトンが規定するような徳ではない可能性がある。彼ら徳ある者たちが、民衆から徳ある者であるとの評価を受けていたとすれば、それは、その当時の徳の概念により彼らが徳ある者とされていたと考えられるからだ。そして、当時の基準による「徳ある者」という評価が後世に伝えられていたとすれば、その意味での「徳ある者」とは、プラトンが規定するような徳を有する者ではないということになるだろう。

ところで、古代ギリシアにおける幸福はエウダイモニア、すなわち、よい(エウ)ダイモニオンであること、あるいはよいダイモニオンとなることであるとされる。その実現のために、プラトンにおける知識としての徳が果たす役割は、Russell が述べるような、現代のエウダイモニア主義者³³における「その持ち主に利益を与える」ものである³⁴とするような徳とは、当然、同一のものではな

31 Kamtekar, p. 32

32 Kamtekar, p. 32

33 現代のエウダイモニア主義者が少なからずアリストテレスの倫理学に拠っているとすれば、プラトンにおける知識としての徳と相容れない部分が生じるのは、当然のことであるといえるだろう。

34 Russell, p. 17 訳については、『ケンブリッジ・コンパニオン徳倫理学』を適宜参照。以降同様。

い。Russell は、エウダイモニア主義者は、人間としての充実を幸福の決定的な要素と考えるからこそ、徳を重要な性格特性と同一視することができるとする³⁵。プラトンにおいては、徳の知識を持っている人が徳ある者としての性格特性を持つといえるかどうかについては、たとえば、徳の知識の獲得を想起により行うとして、想起が容易な概念形成であるか、あるいは高度な学習であるかという解釈によっても、Russell におけるそれとの相違の程度が異なってくるだろう³⁶。

まとめ

本論文では、『メノン』におけるソクラテスとアニュトスによる、自分たちの息子を徳ある者にすることができなかった徳ある者たちに関する対話の箇所を扱い、メノンでなくアニュトスによってこの対話がなされたことについての考察を行った。その上で、現代の徳倫理学におけるエウダイモニア主義とプラトンにおける徳と倫理に関する問題の所在を探った。また、ソクラテスとメノンとの対話において探求の対象となっている知識としての徳と、ソクラテスとアニュトスの対話において探求の対象となっている世俗的な徳の相違を明らかにしつつ、その相違は、徳の探求の方法の相違と不可分であり、現代の徳倫理学との比較のためには、プラトンにおけるこの両者の相違を踏まえる必要があるとされた。

本論文における考察は、そのような相違を踏まえつつ、徳の倫理学に関する、プラトンにおける徳とそれに基づいた善い生き方についてのさらなる考察のための端緒となるものであるといえるだろう。

35 Russell, p. 20

36 この問題に関しては、本論文では扱わず、今後の課題としたい。

参考文献

R. S. Bluck, *Plato's Meno*, Cambridge, 1961

Dominic Scott, *Plato Meno*, Cambridge, 2006

R. W. Sharples, *Plato Meno*, Aris & Phillips, 1985

Daniel C. Russell, Virtue ethics, happiness, and the good life, Russell(ed), *The Cambridge Companion to Virtue Ethics*, Cambridge, 2013 (立花幸司(監訳)『ケンブリッジ・コンパニオン徳倫理学』春秋社、2015年)

Rachana Kamtekar, Ancient virtue ethics: an overview with an emphasis on practical wisdom, Russell(ed), *The Cambridge Companion to Virtue Ethics*, Cambridge, 2013 (立花幸司(監訳)『ケンブリッジ・コンパニオン徳倫理学』春秋社、2015年)

藤沢令夫(訳)プラトン『メノン』『プラトン全集』9巻、岩波書店、1974年

松井貴英「メノンは賢いか否か」*Nagoya Journal of Philosophy*, vol.4, 2005, pp.1 - 16

On Teaching Virtue

Dialogue about examples of failure of teaching“ arete”
between Socrates and Anytus in Plato *Meno*

Takahide MATSUI

In this paper, it is considered the reason that not Meno but Anytus is the interlocutor of Socrates in Plato's *Meno* 89e-95a that statesmen in ancient Athens could not teach his sons “arete” and not make them excellent or virtuous. And, through the consideration of the difference between “arete” as knowledge in the dialogue of Socrates Meno and mundane “arete” of Socrates Anytus, it is indicated that this difference is attributed to the difference of the way to inquire “arete”, and that, in order to compare virtue ethics in ancient Greek philosophy with contemporary moral theory and virtue ethics, it is necessary to consider the difference of them.